

正木弘光
妻銀子
印度人

正邦
五月澤信
佐々木空郎氏
高城泰徳二氏
帝キネ特作映画

主要役割

「略筋」若き連學士の妻としての銀子は、華やかになりし学生時代を追憶して今ながら人妻さへ思ふに誘惑した。正木も久小島の奸策に陥つて正妻を疑ひ途に銀子を離縁して丁つた。その後正木は一圖に研究を續け三年後、美事最高學位を

贏ち得た。そうして彼がその榮位を受ける日偶



馬闌で虐げられて居る事を見つめた。彼は自責の感に打たれ學位を擲つて銀子を救ふべく上海に向つた。そうして正木が漸く彼女を見出した時、彼女は哀れ病の衰へて居た。悪魔の如く彼女に附きまさふ小島は銀子の身代三千圓を正木に要求した。憎惡の炎に燃えた銀子は遂に小島をその場で刺して丁つた。正木は感極つて哀れな銀子を抱きしみたが、銀子は生ける屍となつて居た。抱五月信子嬢正邦宏氏等即ち松竹蒲田より帝キヌ譚リは佐々木空郎氏が五月信子嬢に當て嵌めて書下したものだけ大した無理はない。然し折角名篇「マダム・エフクス」からヒントを得てものにしては、餘りに浅薄であり、俗受を狙ひ過ぎた感が深い。何故もつこ五月信子嬢の演技を生かして演技に於る和製の「マダム・エフクス」な作らなかつたのだらう――。評者は遺憾に思つた。單にあれだけでは松竹時代の「夜の笑」三人肉の市」を一緒にした様な映画さしか云へない小澤得二氏の監督も氏として大した出来ではない。正邦宏氏は相變らず器用に演つてのける。巧み繊張味があつて好い苦である。五月信子嬢の銀子は前記の如く前半は「夜の笑」後半は「一人肉の市」の時の演技と同様で何等進歩もないと評するより外はない。もつて伊志井寛氏の小島は初めての大役で御當人は色敵には不適當である。色敵には不適當である。蒲田派の特作品として見たら失望するが五月信子嬢の平凡な作品と思つて見たら間違ひあるまい。興行價值絶大とは云へないが五月信子嬢の演

蒲田派の特作品として見たら失望するが五月信子嬢の平凡な作品と思つて見たら間違ひあるまい。興行價值絶大とは云へないが五月信子嬢の演

蒲田派の特作品として見たら失望するが五月信子嬢の平凡な作品と思つて見たら間違ひあるまい。興行價值絶大とは云へないが五月信子嬢の演